

# 日本映画学会

## 第21回大会

### 報告集

2025年12月13日（土）10:00開始

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスA号館（A202, A203）

（〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155）

# 目次

大会タイムテーブル ..... 3

## 研究発表記録

戦時下における歴史題材映画の交錯——二つの「アヘン戦争」物語をめぐって ..... 5

朱 芸綺（しゅ げいき、東京大学 教養学部附属教養教育高度化機構 国際連携部門 特任助教）

# 大会タイムテーブル

9:40 受付（第1室）開始／発表 25分・質疑応答 10分

10:05-10:10	開会の辞：塚田 幸光（関西学院大学／開催校） 於：第1室（A202）	
	<b>第1室（A202）</b>	<b>第2室（A203）</b>
	<b>セッション A 【視線とジェンダー】</b> 司会：横濱 雄二（大妻女子大学教授）	<b>セッション B 【メディア、観客、戦略】</b> 司会：板倉 史明（神戸大学教授）
10:10-10:45	（A1）「意外性から脱構築へ——『死んでもいい』に見る石井隆の眼差し」  梅澤 祐典（フリーランス）	（B1）「被写体＝観客の記録——五百旗頭幸男作品における映像実践と上映形態分析」  柴田 真伸（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程）
10:50-11:25	（A2）「誰の子か？——『不信のとき』（今井正 1968／有吉佐和子原作）における家族形態の攪乱」  徐 玉（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院講師）	（B2）「メディアミックス展開先の戦略的選定法——『ある男』を題材に。」  下梶 健太（会社員／京都大学大学院博士後期課程修了）
11:30-13:00	総会（11:30-11:45）塚田 幸光（関西学院大学／開催校） 昼休憩（11:45-13:00）	
	<b>セッション C 【アメリカ・アラカルト】</b> 司会：中村 嘉雄（九州大学教授）	<b>セッション D 【日本×中国】</b> 司会：小川 順子（中部大学教授）
13:00-13:35	（C1）「スタルジーとアイロニー——『ロスト・イン・アメリカ』（1985）における 1980 年代ロードムービーの変貌」  潘 雷（関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士後期課程研究生）	（D1）「戦時下における歴史題材映画の交錯——二つの「アヘン戦争」物語をめぐって」  朱 芸綺（東京大学教養学部附属教養教育高度化機構国際連携部門特任助教）
		<b>セッション E 【少女シネマ】</b> 司会：堀 潤之（関西大学教授）
13:40-14:15	（C2）「映画における不眠表象——『インソムニア』（クリストファー・ノーラン監督、2002）を中心に」  小谷 七生（流通科学大学・大阪公立大学非常勤講師）	（E1）「ミア・ハンセン＝ラヴの映画における少女の表象」  中村 莉菜（大阪大学大学院人文学研究科芸術学専攻アート・メディア論博士後期課程）

	<b>セッション F【バレエ・シネマ】</b> 司会：栗原 詩子（西南学院大学教授）	
14:20- 14:55	(F1)「アートとしてのバレエ表象——ドロシー・アーズナー『恋に踊る』およびマヤ・デレンの実験映画にみる事例の検証」  深谷 公宣（法政大学国際文化学部教授）	
15:00- 16:45	<b>シンポジウム「原一男とドキュメンタリー映画」</b>  司会進行：北村 匡平（東京科学大学准教授） パネリスト： 北村 匡平（東京科学大学准教授） 「日本映画史に原一男を位置づける—ドキュメンタリー—表現の変遷」 中垣 恒太郎（専修大学教授） 「原一男ドキュメンタリーにおける『リアリティ』の創出と変容——『テレビ・ドキュメンタリーの青春』時代の継承と発展」 東 志保（大阪大学准教授） 「原一男監督作品におけるシネマ・ヴェリテ的な要素」 洞ヶ瀬 真人（福山大学准教授） 「水俣再考映画と異性愛表象——『水俣曼荼羅』における婚姻の主題を中心に」	於：第1室（A202）
16:50- 18:10	<b>講演「ドキュメンタリーとフィクション、その境界の破壊と融合」</b>  原 一男（映画監督）	於：第1室（A202）
18:10	閉会の辞：吉村 いづみ（会長）	

## 【研究発表記録】 戦時下における歴史題材映画の交錯——二つの「アヘン戦争」物語をめぐって

朱 芸綺 (しゅ げいき、東京大学 教養学部附属教養教育高度化機構 国際連携部門 特任助教)

アヘン戦争は中国近代史の起点として文学・映画で繰り返し語られてきた歴史事件であるが、この題材を最初に本格的な劇映画として映画化したのは日本であった。南京条約締結から百年後にあたる 1942 年、日中戦争の最中に、日本と占領下の上海でアヘン戦争を扱う二つの劇映画企画——東宝『阿片戦争』と中華電影公司『萬世流芳』——が同時並行的に進められた点は、同一題材の越境と再利用が、異なる制作条件のもとで別様の歴史叙述を生みうることを考える上で重要な事例である。従来の研究は両作をそれぞれ日本映画史／中国映画史というナショナルな枠組みの内部で分析を積み重ねてきた。しかし、両作を「同一時期・同一題材・同一政策スローガン・共通上映圏の想定」という共通条件の下に並置し、物語構造と表象装置の具体レベルまで照合する比較は相対的に少なかった。本発表はこの点から出発し、両作をそれぞれのナショナル・シネマ史の内部に回収するのではなく、「共栄圏映画」という当時の横断的枠組みに置き直すことで、制度配置・制作現場の条件・物語構造・映像表象といった諸要素の連関に着目し、同一題材がいかにして異なる歴史叙述を生み出しているかを明らかにした。

発表ではまず、両作が共有していた制度的条件を確認した。両作はいずれも 1942 年に企画され 43 年に公開され、名目上は英国批判と日中提携を掲げ、アヘン戦争の歴史を通じて対英米戦争の正当性を裏づけることが期待された。また想定観客は、日本・中国それぞれの国内や相手国にとどまらず、香港・シンガポール等の南方占領地を含む広域の上映圏が想定され、両作は「南方映画」として位置づけられていた。この点で両作は、日中それぞれの映画史の内部で完結する作品というより、当時構想された「共栄圏映画」枠内で計画された、同一プロジェクトの異なる二つの節として捉えうる。

こうした共通の制度配置のもとでも、制作現場の条件は大きく異なっていた。東宝側では国策への応答と同時に「大作娯楽映画」としての動員が重視され、スペクタクルとメロドラマを前景化する方向が選択された。監督や美術設計の証言からも、国策的意義の提示以上に、作品を観客にとって魅力的な娯楽映画として成立させることを優先する興行的・職能的動機が強く働いていたことが確認できる。

これに対し日本占領下の上海映画界では、汪兆銘政権による対米英宣戦を背景に反英映画という政策的要請が課されたものの、実際の制作体制はより複雑であった。『萬世流芳』は当時「満州と中国の合作」と称されたが、満洲側（満洲映画）の関与は限定的で、制作の主導権は中華電影側に置かれていた。中華電影は日中共同出資の国策会社でありながら、劇映画の制作は原則として中国の映画人に委ねられ、物語の具体的な構築は彼らが担っていた。この体制のもとでは、作品は露骨な国策宣伝にも明確な抵抗表現にも還元されない、多義的な解釈を可能にする作品が成立しうる条件が形成されていた。そのため本作も、反英という単一の政策目標に直結するのではなく、同時代の切迫した社会問題であったアヘン禍や、占領下で制作に携わる映画人の不安定な立場を織り込みつつ、意味を一方向に固定しない迂回的な表現を選択しうる余地をもっていた。ここから見えてくるのは、政

策スローガンそのものの是非ではなく、同一の制度的枠組みの下でも、制作条件の差異が作品の語りを別様の方向へ分岐させるという点である。

この分岐は、物語構造と歴史叙述の次元に具体的に現れる。両作はいずれも戦争そのものの再現より、戦争に至るアヘン問題と、それをめぐる人々のドラマに重心を置く。しかし、アヘン戦争の歴史を「どこまで描くか」「誰の経験として語るか」という点で大きく異なる。

『阿片戦争』は、禁煙政策を担う官僚として登場する林則徐の活動を物語の枠組みとして据えながらも、『嵐の孤児』（1921年）の翻案を取り入れた姉妹救助のメロドラマが大きな比重を占め、最終的には広州攻防戦における都市壊滅のスペクタクルを頂点として閉じられる。南京条約の締結など戦争の収束と戦後処理は描かれず、アヘン戦争は「燃える都市」と「逃げ惑う民衆」のイメージで切断される。他方、『萬世流芳』は林則徐の禁煙政策着手以前の青年期から、彼の左遷と広州退去に至るまでの生涯をたどると同時に、後半では南京条約の調印過程と条文本体を長時間提示することで、個人の履歴を越えて国家レベルの敗戦処理とその歴史的帰結までを物語の射程に収める。さらに林の伝記的枠組みをもちながら、物語の中心には禁煙運動に献身する虚構の女性・張静嫻を据え、彼女に協力する飴売りの少女や更生するアヘン中毒者など複数の庶民の物語を重ねることで、アヘン戦争を民衆の実践へと移していく。結果として前者が壊滅の光景で歴史を閉じるのに対し、後者は抵抗と継承の物語へと歴史を開いていく。

こうした物語構造の差は、具体的な映像表現においてさらに明瞭になる。戦争表象において『阿片戦争』は特撮を用いた都市壊滅スペクタクルと群衆の避難を重ね、観客に「壊滅していく異国都市を眺める」体験を与える。この構成は、先行研究が指摘するように、救済の訴えを現在の戦争へ接続しうるプロパガンダ的読みにかかれている。他方で本発表では、そうした動員効果と同時に、都市壊滅のスペクタクルがもたらす強い視覚的快楽によって、観客が戦争を切迫したリアルな現実というより、他人事として「眺めてしまふ」距離も生じうる点に注目した。同一のスペクタクルが、観客を現在の戦争へと接続する契機であると同時に、それを安全な距離から見物する対象へと転化させる可能性も孕んでいる。これに対し『萬世流芳』では、戦闘は短いショットと地図で処理され、条約テキストと戦闘前後の演説が中心に据えられる。張静嫻と林則徐の演説は、多義的に読める台詞とカメラワークによって、19世紀の禁煙と侵略者への抵抗の言葉を同時代の観客への現在形の呼びかけとして響かせ、表向きの反英に加え、反日や禁煙といった複数の読みを重ねる構造を形づくっている。

主人公の身体表象もまた対照的である。『萬世流芳』の林則徐が京劇の老生を想起させる静的で語る身体によって道徳的権威を体現するのに対し、『阿片戦争』では演者の歌舞伎スターの身体性が前面に出て、緩慢な所作から剣舞へと爆発する動的で見せる身体によって歴史人物像が再編される。また両作に共通する「歌う少女」のモチーフも、その機能は大きく異なる。『阿片戦争』の挿入歌が、メロドラマ的情绪を高め、異国趣味的な「エキゾチックな中国」を彩る周縁的・装飾的要素として用いられているのに対し、『萬世流芳』では歌そのものがアヘン批判という主題と直結し、物語を駆動する中核的な語りの媒体として機能している。さらに階段を移動しながら歌う類似構図も、上昇が私的感情の高まりを示す前者に対し、下降が苦しむ民衆の場へ降りていく身振りとな

る後者という対照をなす。全体の人物配置において、『阿片戦争』では政治・軍事の主体が少数の男性官僚に集中し、中国民衆は受難の群衆として背景化されるのに対し、『萬世流芳』では複数の女性や弱い立場の人々が抵抗の担い手として前景化され、男性官僚はそれを見届け言語化する位置に置かれる。ここに現れているのは、ジェンダー差というより、誰を歴史の主体として描くかという叙述姿勢の差である。

こうした『萬世流芳』における多義的な含意は、当時の批評空間では検閲と占領状況の制約のもとで婉曲的にしか語られなかったが、戦後直後の公的審査意見では、反英色の強調よりもアヘン禁止と民族的自立という主題が前面に評価され、その含意が一定程度肯定的に受け取られていたことが確認できる（もっとも 1950 年代以降には評価の基調は再び変化する）。ここからも、『萬世流芳』が単線的な国策宣伝に回収しきれない、多義的なテキストとして読まれる性格を当初から備えていたことがうかがえる。

両作は互いに独立した国民映画ではなく、同一の政策的・興行的回路のなかで並行的に制作・上映され、同じ歴史題材に対する同時代的な応答として観客の前に現れていた。にもかかわらず、「共栄圏映画」として共通イデオロギーへの「協働」が期待されて企画された両作は、その期待とは裏腹に、歴史叙述が異なる方向へ展開し、相互にずれや緊張を生む「交錯の場」として成立していたことが確認できた。それは、同一の歴史素材が国境を越えて移動する過程で、それぞれの社会における政治状況、制作環境、検閲体制、観客意識の差に応答しながら、単一の意味へと回収されるのではなく、複数の映画的語りへと分岐していくことを示す事例である。

以上を踏まえると、本研究は、「アヘン戦争」の物語が一国の国民史や単線的なプロパガンダ史に回収されるのではなく、越境的な制度配置と上映圏のもとで繰り返し再編成されるプロセスの一局面を明らかにする試みと位置づけられる。ここで問われているのは、どの解釈が唯一正しいかではなく、同じ歴史事件が異なる場所と条件に置かれたとき、どのような語りの幅と解釈可能性が立ち上がるのかという点である。今後は、戦後の日中映画における同題材の再表象や再解釈も視野に入れ、歴史題材が時間的・空間的な移動のなかでどのように重ね書きされ、変奏され続けてきたのかを、より長期かつ広域的なトランスナショナルな枠組みの中で検討していく予定である。

# 日本映画学会

2026年3月10日発行

発行・編集：日本映画学会（会長：吉村 いづみ）／編集長：小暮 修三

大会運営委員長：塚田 幸光 ／運営委員：北村 匡平、須川 いづみ、中垣 恒太郎

開催校責任者：塚田 幸光

事務局：北海学園大学人文学部 大石和久研究室内

〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4-1-40

事務局分室：流通経済大学 共創社会学部 須川まり研究室内

〒270-8555 千葉県松戸市新松戸 3-2-1

事務局メールアドレス [japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp](mailto:japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp)

学会公式サイト <https://japansociety-cinemastudies.org/>

学会公式ブログ <http://jscs.exblog.jp/>